

釧路南ロータリークラブ会報

第10回 例会報告 2008.9.12 通算1269回

・点 鐘 北上会長

・ロ - タリ - ソング
「我等の生業」



ソングリーダー 安藤 整治会員



・会 長 挨拶



・お客様と来訪ロータリアンの紹介

釧路北 R C 地区大会副実行委員長	高橋邦弘君
釧路北 R C 地区大会実行委員会幹事	森山義文君
釧路北 R C 地区実行委員会副幹事	荻原昭博君



北クラブ3人の皆様。初めてのお越しにお礼申し上げます。会長幹事とは8月22日の美瑛白金温泉でのライラセミナーで同部屋で楽しくわたしは勝手に楽しく遊んで頂いたのを強く記憶しています。村井会長には勝手なことばかり言っては迷惑をかけてばかりいるのに、今期、合同例会の提案をして頂き感謝申し上げます。北クラブさんのあふれるエネルギーには及びませんが是非一緒に語れる集いをお願いしたいと思います。

ガバナークラブとしての大変な忙しさは良く見えます。是非、釧路のロータリーの雄としての期待をこめまして今後のお互いの友好と協力を育み発展に寄与できれば幸いです。又、8月31日は、2008~09年度ロータリー財団セミナーに行ってきました。交換留学生の解散に伴う約60万円の剰余金処分について、各クラブ配分返還再開年まで留保案、一般会計への編入案など出まし

たが結論は次会に持ち越されています。
いずれにしても、その会計の明朗化が必要な内容でもありました。ご意見を頂けましたら、いつかお願いいたします。ゴルフの広告寄付が手違いで1年前前払いが集金遅れになり今回後払いになるとの報告でありました。ご理解をお願いいたします。

・幹事報告



* 厚岸RCより会報を拝受しております。

* 地区大会御案内



釧路北RC地区大会副実行委員長

・委員会報告

親睦委員会

・本日のニコニコ献金

山本 美穂会員

出席委員会

会員 28 名 16 名出席 57%

・本日のプログラム

「 会員ミニ卓話 」

担当 職業分類委員会

山本美穂会員



今日の卓話のテーマなんですが、先週オリエンタルプラザの3階に2号店をオープン致しまして、ちょうど開店に至るまでのエピソードや苦労話なんかたくさんあるのですが、なんせ産みの苦しみをさんざん味わい、やっと一息つけるようになったところなので、夜中にまた仕事の事を思い返して原稿を書くのも嫌なので、今回は先月一周忌を済ませた、亡くなった父の話を少し話したいと思います。父は膵臓がんで63歳で亡くなりました。1年近く闘病生活を続けていたのですが、さすがにその時のことはまだ思い返すのが少し辛いので、父の葬儀のときのちょっとしたエピソードを話したいと思います。クラブの皆さんは私より人生の先輩の方が多いので、肉親の葬儀を経験された方が中にはいらっしゃると思うのでそういう方はよくわかると思いますが、葬儀には必ずっていいほど、もめ事、争い事が起きるそうです。うちにも例外なく事件が起きたわけなのですが・・・私と姉は、父が入院している間ほとんど毎日病院に行っていました。母も阿寒町から毎日きていました。夕方の食事の時間になると、仕事を終えた姉がやってきて、女3人のおしゃべりが始まるわけですが、具合が悪い時の父にはきっと苦痛だったと思うのですが、一人で病室で過ごす時間の長かった父にとってその時間は待ち遠しい時間だったと思います。21歳で結婚して家を出てから父と母と姉と一緒に時間を過ごすなんて事は本当に少なかったのが、辛い中ではありましたが唯一楽しかった事でした。そうやって1年過ごし、家族の絆を改めて実感して、いよいよ葬儀になったわけです。お父さん子だった私は、落胆から無気力に

なっしまい何にも手伝う事ができなく、ず～っと父のそばにいたのですが、その夜、親同士も親しい同級生がお焼香にやってきて、私にこう言うわけです。「お父さん、さっき私のとこに来てね、今着ている浴衣が気に入らないって。白くて襟に黒い線の入ったポロシャツが着たいって言うてるよ。それからもう一回いつも横になっていたテレビの前で横になりたいって。いつも掛けていたバスタオルみたいのを掛けてほしいって言うたよ。」って言うんです。私にしたら、もう何も言うてくれなくなっちゃった父が、何かを言っているんだと思うと、なにが何でも聞いてやらなきゃと思い、母に勢いよく言いに行きました。そしたら母が泣きながら激怒したわけです。「父さんが自分の家族以外のところになんていくわけがないでしょ！ どうしてそんなこと信じるの！」と。白くて襟に黒い線の入ったポロシャツは私が父にプレゼントしたと思われるものでした。でも、父に着せた浴衣は、母が日本舞踊をやっていた時に着ていたもので、父が亡くなる前に母が洗って泣きながらアイロンをかけて用意したものでした。母がどんな気持ちで浴衣を用意し父に着せたのかをその時は考えてあげる余裕もなく、母を傷つけ、また自分もその友達の言葉に悩まされ、葬儀の間ずっと母とはギクシャクした感じでした。その時冷静になって考えれば、母との喧嘩も回避できた事だったのでしょけど、家族みんなが普通の状態じゃないので、つまらない事でせつかく築いた絆にヒビが入ってしまったのでした。でもその後半年くらいたって母や孫たち家族みんなが京都の本願寺にお参りに行くことになり家族旅行を楽しみながら父を偲んでまた絆を取り戻すことができました。父が亡くなる前、亡くなった後、本当に色んな事を学びました。病院で出会ったおじいちゃんおばあちゃん、それを介護する家族の方たち。病院の職員の皆さんにも本当によくしていただきました。本当に辛かってこういう事なんだ、自分がしていただいて本当に有り難かった事は自分もできる人間になろう。とか。でも一番みてて不思議だったのは、夫婦の絆でした。誰よりも娘の自分が父に何かしてあげたいと思っても母には絶対になれないのです。血のつながった娘の自分がどうして？と母に変な対抗意識をもった事もありました。母は自分の父親が亡くなった時の何十倍も辛いと言っていました。結婚して16年ですが、いずれ自分もわかる日がくるのかな～と思うとなん

だか不思議な感じがします。先輩方はもうなんとなくわかっているのでしょうか？今の母をみていると夫婦ってすごいな～と改めて感じる今日この頃です。

渋谷 諭会員



先週行われた「釧路どんぱく」の花火大会を見に行ったのですが、せつかくの3尺・2尺玉が低い雲が立ち込めていたため音だけで何も見えませんでした。会員のみなさんも見に行かれた方がいらっしゃると思いますが、とても残念でしたよね。そこで、テーマを「花火」と題してお話させていただきます。花火の歴史は、紀元前3世紀（日本で言うと弥生時代くらい）の中国で爆竹が使用されたのが起源だという説もあるが、最初期の花火は6世紀、中国で火薬が使われるようになるのとほぼ同時期に作られはじめたと考えられている。ただし、10世紀まで花火は存在しなかったという主張もあるが、いずれにしても、発明の地は中国であったとされる。最初期のものは、例えばロケット花火に似たものを敵陣に打ち込んで火事を起こしたり相手を威嚇したりといった、武器との区別がはっきりしないものもあった。それからヨーロッパに伝わったのは13世紀（1201年～1300年）以降で、初期のものは祝砲の音を大きくしたり、煙に色などがつくようにしたものだったと考えられる。ヨーロッパでの主な生産地はイタリアで、火薬と花火製造が盛んに行われた。この時代、ヨーロッパの花火は主に王の権力を誇示するため、王が催すイベントなどで揚げられた。16世紀になるとイングランドで花火の技術が大きく進歩する。王室軍隊の花火師を徴用するための規則を定めたそうです。また17世紀になるとポーランドやスウ

エーデン、デンマークなどに花火学校が設立され、体系的な知識を有す専門的な花火師集団が形成されていった。また1672年には花火研究所が設立され、1683年には花火に関するテキストが刊行されるなど、発展していったのである。日本ではと言うと、日本で花火が製造されるようになったのは16世紀の、鉄砲伝来以降である。1613年に徳川家康が外国人の行った花火を見物したというのが、花火という語で確実に花火が使われたと分かる最も古い記録だそうです。江戸時代になり、戦がなくなると、花火を専門に扱う火薬屋が登場した。1648年には幕府が隅田川以外での花火の禁止の触れを出しており、花火は当時から人気があったとされる。当時のものは、おもちゃ花火であったと考えられる。現存する日本で最も古い花火業者は、東京（当時の江戸）の鍵屋であり、1659年に初めておもちゃ花火を売り出した。その後大型花火の研究を進め、1717年には水神祭りに合わせて献上花火を打ち上げている。1733年、関西を中心に飢饉に見舞われ、江戸ではコレラが猛威を振るい多数の死者を出した暗い世相の中、将軍吉宗が死者の慰霊と悪霊退散を祈り両国大川（隅田川のこと）の水神祭りを催し、それに合わせて大花火を披露した。これが隅田川の花火大会の起源になったと言われている。鍵屋と並んで江戸の花火を代表したのが玉屋である。鍵屋番頭がのれんわけして玉屋を名乗る。このように鍵屋、玉屋の二大花火師の時代を迎えるようになった江戸では、両国の川開きは、両国橋を挟んで上流を玉屋、下流を鍵屋が受け持つようになった。当時の浮世絵を見ると玉屋の花火は多く描かれており、また「橋の上、玉や玉やの声ばかりなぜに鍵やといわぬ情けなし」という歌が残っているそうです。このことから玉屋の人気が鍵屋をしのいでいたと考えられる。しかし1843年、玉屋から失火、店のみならず半町ほどの町並みを焼くという騒動があり、失火は重罪と定められていた当時であり、玉屋は財産没収・追放となってしまいました。花火に関しては特に江戸での記録が多く残っているが、これ以外の地方で花火が製造されなかったわけではない。特に、外国と交易のあった九州と、長野、愛知などでは、江戸時代から花火がつくられていた。特に、現在の愛知県岡崎市付近は徳川家康の出身地ということで、火薬に関する規制がゆるやかであり、江戸時代から町人が競って花火を製造した。現在も岡崎周辺におもちゃ花火問屋が多いのは

この名残だといわれている。これ以外の現在の花火の主な産地は長野県、新潟県、秋田県、茨城県で、徳川家にゆかりのある地方が多い。明治時代になると、海外から塩素酸カリウム、アルミニウム、マグネシウム、炭酸ストロンチウム、硝酸バリウムといった多くの薬品が輸入され、それまで出せなかった色を出すことができるようになったばかりか、明るさも大きく変化した。これらの物質の輸入開始は1879年から1887年にかけて段階的に行われ、日本の花火の形は大きく変化した。新たな薬品によって多彩な色彩を持つ鮮やかな花火が誕生した反面、化学製品に対する知識不足から相当な事故が発生したのも明治時代である。それまで花火の製造は打ち上げには何の免許も規制も存在しなかったが、1910年に許可制となった。これ以前の地方の花火は、農家などが趣味で製造しているものが多かったが、この後、化学知識を駆使する必要から花火師の専門化が進むことになる。大正時代は発光剤としてのマグネシウムやアルミニウムなどの金属粉が登場し、夜空により鮮やかな大輪の華を咲かせられるようになったそうです。このように順調に技術を発展させていった花火であるが、昭和に入り戦火が拡大する世界情勢で停滞期を迎えることになる。花火製造は禁止はされないかわりに高い物品税がかけられたが、それでも慰霊祭や戦勝祈願の花火が上げられていた。しかし戦火の拡大により隅田川川開きの花火大会も1937年に中止となった。そんな中、花火製造業者は防空演習で使用する発煙筒などを製造していた。終戦後は1945年9月に長野市の諏訪神社で花火が上げられるが、翌10月に連合軍総司令部により火薬製造が禁じられた。日本の花火製造業者の粘り強い説得により、1948年にはGHQが在庫花火の消費を許可、これを受け両国花火組合主催、読売新聞社が後援の両国川開きの花火大会が1948年8月1日に復活した。この時は打ち上げ許可量が僅か600発であったが、70万人の観客が集まったそうです。終戦後はおもちゃ花火を含め、日本の花火は海外に多く輸出されたが、現在は中国からの輸入量のほうが多く、輸出は激減しています。ここから花火の値段の話をして頂きます。花火の種類、複雑さ、花火師により複雑に価格が大きく異なるが、一般的な打ち上げ花火の一発あたりの相場は3号玉が約3,400円で5号玉が約1

万円。10(1尺)号玉が約6万円で20(2尺)号玉が約55万円となっています。で、30(3尺)号玉だったらいくらなんでしょうね。150万~250万とか言われているみたいですけど、業者さんの言い値なんですかね。よくわかりません。その他に花火師の日当や交通費、宿泊費、食費などがかかります。「どんぱく」の花火大会でいくらかかっているかわかりませんが、わかる人がいたら教えて下さい。やはり特殊な物ですから業者さんとかの値引き交渉とかあるんですかね。その辺もちょっと気になります。地域の経済効果を考えれば、地方からお客さんがもっともって足を運んでくれるようなイベントになって欲しいと思いましたが、花火大会って企業の協賛ですよ

ね。
今の経済状況を考えると、規模が小さくならないように祈るしかないです。ちなみに新潟県で毎年4尺玉が打ち上げられ、世界最大の花火と言われております。3尺で約550m開くそうですが、4尺になると800mも開くそうです。 以上

長江 勉会員



私は、仕事の関係もあり、釧路と帯広をよく比較することがあります。

釧路の産業は主に水産、石炭、製紙など自然界にある資源が主力の産業が多く、私は、どちらか言うと狩猟民族ではないかと思ひます、又、帯広は畑を耕し肥料をやって種を蒔いて手入れをし、収穫をする、農耕民族ではないかと思ひます。

釧路の人と帯広の人とを比べてみると、釧路の人はどちらかと言うと何でもすぐに受入、大ざっぱではないでしょうか、帯広の人は地元を大切に、外来業者などはあまり受け入れないところが有る町だと思ひます、今、釧路には帯広の企業がものすごく、

進出してきております、フクハラ、柳月、六花亭、ウエスタン、岡本グループ(セルフスタンド、長之助、カラオケボックス)イエローハット、など多くの企業が釧路で商売をしております、それは釧路の企業は帯広に何社進出しているのでしょうか、私の知っている範囲では、なごやか亭がある位で、ホームックもありますが今は釧路の企業とは言えない状況です、釧路からも何社か帯広に進出した企業もありましたが、旨く行かなかつたように聞いております、又、建設関係を見てみましても、帯広は年商100億前後の建設会社が数社ありますが、釧路は3社か4社足して100億になる状況で、帯広の大手建設会社が釧路管内でも大型物件を受注し工事をしておりますし、帯広の住宅メーカーで昨年の9月に釧路に進出してき住宅会社が在りますが、地元の業者が受注に苦労している中、20年度3月まで30戸位の受注目標を立てて営業展開しておりますが、ほぼ受注の目途がついたと聞いております、帯広、釧路間の高速道路が開通しますと、帯広の企業が今まで以上に釧路に進出してくる事が考えられます、私を始め釧路の企業は地元の市民に受け入れられる経営努力が必要ではないか。

又、釧路市民は地元意識をもっと高める必要があるのでは、其の事によって地元で金が回り釧路の町が潤い、今まで以上に発展するのではないかと思います。

釧路の町が帯広市釧路町に成らないように心がけ努力していきましょう。

・次回のプログラム

9月19日(金)

「ポリオ撲滅説明」

会場 釧路ロイヤルイン 11F

担当: 会長・幹事

・点 鐘 北上会長

今週の会報担当: 佐藤玄史会員